

地域性の形成論理

1. 研究組織

研究代表者：坪内 良博（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：石井 溥（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

加納 啓良（東京大学東洋文化研究所・教授）

北原 淳（神戸大学文学部・教授）

桜井由躬雄（東京大学文学部・教授）

山下 晋司（東京大学教養学部・助教授）

田中 耕司（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

2. 研究のねらい・目的

平成5年度の成果報告でふれたように、本研究班では、地域研究の対象である「地域」の社会および文化の独自性の形成にかかわる普遍論理と個別論理の交錯のメカニズムを、東南アジアおよびそれを挟む中国・インドの状況を手がかりとして解明することを研究の大きな枠組みとしている。そのために、平成5年度においては、次の二つの研究のねらいを立てた。まず、その一として、東南アジアの社会・文化の特徴を表すさまざまなキーワード（例えば、「小人口世界」「複合社会」「フロンティア世界」「稠密社会」、あるいは社会組織にかかわる「緩やかな構造」「双系制」「圏」「ネットワーク」など）を東南アジア各地の具体的事例に即して、また東南アジア以外の地域との比較において掘り下げていくこと、そして、その二として、「中心と周辺」「国家とエスニシティ」あるいは「都市と農村」というような二項対立的な概念枠組みのなかで、東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムをあつかうこと、この二つを本研究班の目的として設定した。

平成6年度には、以上の二つの目的を念頭に、各メンバーの個別課題に加えて、班全体の共通テーマとして、「フロンティア」ならびに「周辺と境界」という課題をあつかうことにした。

東南アジアは、かつて中国やインドの「中心世界」から見て「周辺世界」として位置づけられていた。また、近代以降の植民地主義の時代から現在に至るいつの時代においても「世界」の「周辺」として位置づけられる状況が続いている。そのことは、一方では、この地域が「世界」の「フロンティア」として、資源収奪、地域開発、近代化などの最前線として「世界」が注目する地域でもあったことを意味している。東南アジアの域内においても、「中心と周辺」という構造はますます顕著になりつつあるようである。国民国家形成の過程で、国内の中心地

域と周辺（周縁）地域がさらに顕在化し、ますますその構造が強固になりつつある。

東南アジアをよりミクロに見ると、人口の過密と過疎の併存、あるいは資源と開発の遍在という条件のもとで、域内において常に人口の流動化と資源利用の変化が生起しており、それが常態的な「フロンティア」状況を東南アジアにもたらしている。大陸部デルタや島嶼部のジャワそして大都市などの人口稠密空間と、その対極にある大陸部の山地や島嶼部の低湿地や山地などの小人口空間とのあいだの人々の移動が「フロンティア」状況を常に生み出している。また、このことが域内あるいは国内における「中心と周辺」という観念の固定化をさらに進めているといえよう。

以上のような考えのもとに、平成6年度においては、とくに「フロンティア」および「周辺と境界」を共通テーマとして、地域性の形成と変容のダイナミズムを東南アジアの具体的事例にもとづいて明らかにすることとした。

3. 平成6年度の研究経過

上述のような共通の研究課題を設定して、以下の研究会を開催するとともに、関連する研究班との合同研究会をもった。

研究打合せ会（6月19日、京大東南アジア研究センター）

各メンバーの平成5年度の研究経過をふまえて今年度の役割分担課題を打合せ、下記のような課題をそれぞれ設定した。また、平成6年度の研究実施計画を打合わせた。

坪内良博：全体の総括、および「小人口世界」の形成と「フロンティア」状況を、東南アジア島嶼部の人口史とカリマンタンの最近の調査をもとに検討。

石井 溥：地域性と外文明。ネパールを対象として、ヒンドゥー文化の周辺域における中心と周辺の関係を検討。

加納啓良：ジャワにおける「稠密社会」形成の歴史とその出現の意味、および国民国家形成のもとでの「ジャワニサシ」の分析。

北原 淳：タイ国における領域支配の歴史過程を分析し、周辺地域の属人的支配と属地的支配の形成・変容を分析。また、近代化のなかでの都鄙関係から村落共同体論を再検討。

桜井由躬雄：紅河デルタの地域性を「歴史圏」の形成という視点で分析し、東南アジアにおける紅河デルタの特異性を検討。

山下晋司：エスニシティと地域性。とくに歴史的状況のなかで「創出されるもの」として

のエスニシティをインドネシアを例に検討。

田中耕司：東南アジアの開拓前線での資源利用をめぐる「フロンティア」状況を、インドネシアの現地調査から検討。

第1回研究会（9月25日、学士会館分館）

「東南アジアにおける周辺と境界（1）」というテーマで研究分担者3名が個々の分担課題に沿った研究発表を行った。また、研究協力者として尾形勇氏（東京大学文学部：中国古代史）を招き、共通テーマに沿って中国における「中心と周辺」の史的展開について話題を提供いただいた。発表者・テーマは以下のとおりである。

田中耕司 「フロンティア世界としての東南アジア：『資源』をめぐる中心と辺境」

北原 淳 「タイにおける都市・農村関係の歴史的展開：19世紀徭役制度を中心に」

坪内良博 「中心としての周辺 — 東南アジア地域理解のための試論」

尾形 勇 「天下と辺境」

田中は、昨年度の研究発表を展開するかたちで、東南アジアの「資源」（熱帯の希少物産、工業原料としての一次産品、木材・石油・ガス、食糧・土地）をめぐる人の動きを、ネットワーク型、ディアスポラ型、コロナイゼーション型、ディベロプメント型に類型化し、カリマンタンの調査事例を引きながら「資源」をめぐるフロンティアの形成（「フロンティア連鎖」としての東南アジア）と「中心と周辺」構造の展開（域内序列化の進む東南アジア）を対比しつつ、東南アジアの地域性を検討した。北原は、前近代における国家による地方の支配構造としての徭役制度を取りあげて、自然発生的な共同体としての農村という従来のとらえ方に対して、国家権力により作られた地方・農村という立場から、徭役負担農民に関連する法令等を分析して、歴史的所産としてのタイの「中心と周辺」構造の成立を論じた。坪内は、「フロンティア世界」としての東南アジアという枠組みを手がかりに、東南アジアの地域性を考えるうえでのいくつかの問題点を指摘した。例えば、東南アジアにおける「中国化」や「インド化」の影響を受けなかった「地域」や「文化」が東南アジア固有のものという視点ではなく、移り住み、住み着いてそこをフロンティアとして利用した人々がもつ特性を東南アジア的特質としてとらえる視点を重視しようという指摘はその一つである。こうした視点から、生業、民族、都市などの諸問題を考える重要性を示唆した。尾形の発表は、東南アジアの「中心と周辺」を相対化するためにとくに依頼したもので、中国における「中心（天下）と周辺（辺境）」概念の秦・漢代における萌芽から華夷秩序の形成に至るまでの歴史的展開を扱ったものである。

第2回研究会（1月22日、京大東南アジア研究センター）

第1回研究会に続いて、同じく「東南アジアにおける周辺と境界（2）」のテーマで研究分担者4名が以下の研究発表を行った。

桜井由躬雄 「東南アジア史の中心と辺境」

石井 溥 「南アジアの周辺社会を考える」

山下晋司 「フロンティアの民族文化 — インドネシアの調査から」

加納啓良 「インドネシアにおける中心と周辺 — 『ジャワ』と『外島』」

桜井は、一定の時期に共通した歴史的運命を共有した特定の領域を「歴史圏」として定義したうえで、「地域」はその歴史圏の重層のうえに成立するとした。こうした「地域」に関する論議をふまえて、小人口、圈的結合、移動社会などの特徴をもつ東南アジアのなかで、きわめて異質な、従ってその故に東南アジアにおいては「周辺の」とでも位置づけることのできる紅河デルタの地域性について報告し、その特徴が、近代以前の強固な村落結合に由来することを明らかにした。石井は、ヒンドゥー世界の周辺地域としてのパルパテ・ヒンドゥーやネワールの社会・文化と中心地域としてのミティラーのそれとを自身の調査地での体験にもとづいて比較し、周辺社会で起こる文化・社会変容の特性を考察して、その社会の地域性とでも呼べる性格が、中心地域がもつ規範性に対する柔軟性と固執性の両面にうかがえることを報告した。山下は、バリでの調査から、国民国家という枠組みのなかでバリのさまざまな文化が「地域」文化として国家および地方の行政の「指導」のもとに「育成」「産出」されている現状を報告した。このような指導・育成が、芸能や観光などの側面だけでなく、行政・経済などあらゆる側面に浸透していることをふまえて、民族文化すらが今やよりマクロな国家や世界資本主義のフロンティアとして生産されていることを論じた。加納は、これまでに本研究班で行ってきた彼自身の発表が、東南アジア経済の「中心」と「周辺」、インドネシアの「中心」と「周辺」、そしてジャワの「中心」と「周辺」、という3つのレベルの報告であったというふうに整理し、とくに現代インドネシアの政治・経済が、ジャワと外島という対比のなかで、全般的な「ジャワニサシ」の浸透として展開していることを報告した。

合同研究会（第1回：5月28日、楽友会館、第2回：7月2、3日、神奈川県足柄下郡）

「地域間研究の構図 — 東南アジアと南アジア」というテーマで、2回にわたり、B03計画研究班およびA03計画研究班との合同研究会を開催した。南アジア研究者を招き、ヒンドゥー教およびカースト制によって巨大なまとまりをみせる「インド世界」と、それに対比してまとまりを欠く「東南アジア世界」との比較のなかから、両者の地域性をさらに明らかにする試みとして実施された。

以上の研究会の他に、総括班が主催した研究集会「発展の地域性」（11月18日～19日、京都市リサーチパークにて開催）には、本研究班から加納が「東南アジア植民地経済の『中心』と『周辺』：国際貿易論の視点から」と題する発表を行った。これは、東南アジアを国際分業・貿易の視点からみたとき、この地域はどのように、そしてどの程度まとまった地域としてとらえられるのかという問題意識をもって、おもに戦前・戦中の貿易統計を素材に分析した結果を報告したものである。また、同じく総括班が主催した年度末のシンポジウム「地域と生態環境」（3月2日～3日、東大山上会館にて開催）では、田中が「社会慣行の規範性：森林の利用と開墾をめぐる地域の論理と国家の論理」というテーマで話題提供を行った。インドネシアの開拓前線での森林と農地の境界をめぐる問題をとりあげ、この地域が、自然と人間が対峙したたんなる開拓地という地理的空間としてだけではなく、国家の法と住民の生活が対峙する社会的意味空間としての問題も内包していることを指摘した。

4. 研究の成果とフロンティア

以上の研究会での研究発表と個別のテーマの追究を中心に平成6年度が経過したが、共通のテーマを「フロンティア」や「周辺と境界」という比較的あつかいやすいテーマに絞ったことも効を奏して、概ね順調に研究活動を進めることができた。今年度の共通テーマに関連した各メンバーのそれぞれの研究成果は、『総合的地域研究』第8号にまとめることができた。いずれもそれぞれのメンバーが、各自のフィールドを顧みながら、「フロンティア」や「周辺と境界」という今年度の共通テーマを念頭に書き上げたものである。同誌での掲載順に報告のタイトルを列挙すると以下のようなものである。

- 加納啓良 「『フロンティア』とジャワニサン」
- 桜井由躬雄 「辺境と集団性 — 紅河デルタ村落報告」
- 石井 溥 「周辺社会における中心指向性と柔軟性 — 南アジアの北縁から」
- 北原 淳 「タイの地方国における徭役制度」
- 山下晋司 「フロンティアの民族文化 — インドネシアの調査から」
- 坪内良博 「フロンティア世界への旅」
- 田中耕司 「森は誰のもの — 南スラウェシ州の開拓前線における森林と農地の境界」

以上の7つの報告に現れた「フロンティア」あるいは「周辺」ということばの用法における多様性は、東南アジア地域研究における、これらのキーワードの含意の深さを示している。この論文集に現れたように、グローバルな配置における「周辺」としての東南アジア、そのよう

に位置づけられた地域のなかでの「亜中心」ないし「副次的中心」の形成、さらには「周辺」自体を地域の本質的部分とみる「中心」の逆転など、さまざまな視角から東南アジアの地域性へと迫る試みがなされたことが、今年度の大きな収穫であったといえよう。以下に、研究組織のメンバーそれぞれがまとめた「研究の成果とフロンティア」を引用して、平成6年度の成果を概括することにした。

坪内良博： 本年度におけるA02班は、東南アジアを中心とする地域形成論の研究のために、共通テーマとして、「周辺」および「フロンティア」というキーワードを設定した。東南アジアは、中国、インドの周辺に位置づけられ、ごく近い過去まで小人口の世界を保ってきた。この状態が19世紀後半ないし20世紀前半に、フロンティアの開発をともなって、地域の性格の形成に大きく影響したことを考慮し、その基礎となる状況の確認を行うべく、19世紀の島嶼部東南アジアの人口分布に関する資料収集とその整理、ならびにこの状況をふまえた地域の性格形成の見通しを試みた。

石井 溥： 南アジアに主な焦点をあてつつ、地域差、地域性および周辺文化についての分析・考察を行なった。具体的な研究対象地域は、インドのビハール州北部とネパール南部にまたがるミティラー、ネパールの主要住民パルバテ・ヒンドゥー（母語ネパール語）の根拠地である山地低部、およびネワールの故地であるカトマンズ盆地、の3地域である。方法としては、ヒンドゥー文化の中心のひとつ（ミティラー）に、周辺の2社会（パルバテ・ヒンドゥーとネワール）を対照させ、それぞれの文化・社会の性格を究明する方向をとった。扱った側面は、儀礼、カースト的慣習、社会関係、およびその歴史的背景などであり、比較の結果として、中心での自由度の高さ、周辺文化の柔軟性、周縁地域の小中心での慣行順守の厳格さ、などが明らかになった。

加納啓良： 第一に、ジャワにおける「稠密社会」形成の歴史的起源と過程を、19世紀初めの地稅制度導入期の農村について検討するため、東部ジャワのバンギル県の地稅賦課「詳細査定簿」（detailed settlement report）の村落・耕作者別データをパソコン・データベースに入力する作業を開始した。第二に、近現代の東南アジア地域全体の中でのジャワの国際経済的地位とその変化をよりグローバルな視野から考え直すために、1910～30年代の東南アジア全域の国際貿易の統計データを分析し、その意味を考察する作業を行った。そして、第三に、ジャワ型の集約的水田稲作農業が直面しつつある限界とその変貌の可能性を、インドネシアにおける国民国家形成という歴史的な文脈の中で検討するために、「フロンティアとジャワニサシ」という題目で序論的概念論的考察を試みた。

北原 淳： タイのNGO運動が無条件で評価する「共同体文化」のもつ問題点を、アニミズム的認識の構造を中心に検討した。それは伝統的文化の基礎にあって、農民のアイデンティティと自立的精神を形作るといわれている。しかし、その認識は、親しく信用できる共同体内部と、よそよそしく信用ならない共同体外部という二重の構造を想定しており、内部での結束は強いが、外部に対して積極的に関わらず、交渉もしない、という特徴をもつ。したがって共同体を拠点とする外部への抵抗という図式にはあてはまらない。

桜井由躬雄： 地域とは物理的「地」平の範「域」を区分することを意味するものではない。地域性とは、地域の個別性の主張である。従って、地域的個別性の対立概念は世界的普遍性である。この意味で、これまでのフィールド諸学が、地域の相対性を確認することを通じて、世界的普遍性原則に立脚していたことに明確に対峙するものである。本計画のテーマである地域形成の条件とは、それぞれの地域の個別性が形成される過程を追究することによって、その形成条件を認識しようとする試みである。従って、前者を地理的空間的地域把握とすれば、後者は歴史的時間的地域把握とすることができよう。

以上の理解のもとに、平成5年度に続いて海外学術調査「紅河デルタ村落の研究」計画（平成5年～7年）との協力のもとに、紅河デルタ歴史圏の地域性を村落集団の形成のなかから明らかにする作業を行った。研究対象の標準単位として紅河デルタの新デルタ末端に位置するハナム省ヴァン県バックコック村落をとりあげ、村落内においてきわめて強固な結合を維持するゾンホー（祖先神を共有する祭祀集団）とソム（地縁結合による社会集団）という二つの社会集団を通じて、村落内の実際の各種の社会関係が維持されていることが明らかになった。このように、閉鎖的村落集団の持続を通じて形成された紅河デルタ歴史圏の特徴は、東南アジアのなかではきわめて特異な地域として紅河デルタを性格づけている。

山下晋司： エスニシティあるいは民族文化を本源的ななにかというより、ある政治的・歴史的状況のなかで創出されるものという立場から文献資料を検討するとともに、インドネシアのバリで現地調査を行った（平成6年度文部省科学研究費国際学術研究「東南アジア島嶼部における国民文化と地方文化の相関的動態」〔代表者：山下晋司〕の一環として）。その結果、エスニシティもしくは民族文化の創出にあたってとりわけ植民地権力や国家権力の役割に注目する必要があることがわかった。現地調査においては今日のバリの民族文化の産出にあたってのバリの州政府文化局の果たしている役割について調査を行った。

田中耕司： 開拓前線というフロンティア状況をきわめて明瞭に有する地域での事例研究を素材として、今年度の研究班の共通テーマである「フロンティア」や「周辺と境界」という課

題に迫ることにした。国家のなかの周辺地域として位置づけられる開拓前線が、実は、国家と住民が資源をめぐるべく対峙する社会的意味空間であること、そしてその故に、周辺地域が「フロンティア」としての性格をさらに強め、その性格を長く持続させることを論じた。また、「境界」という概念については、開拓前線の進展にともなう森林と農地の境界の問題をとりあげて、境界地域における資源管理の問題点や資源利用をめぐる権利関係の錯綜状況について考察した。

5. 今後の課題

以上に述べたような平成6年度の研究経過および各メンバーが抱えている問題意識をもとに、次年度以降は、東南アジアの地域性に関わる諸概念のさらなる精緻化と具体的事例に即した研究手法の確立を目指すことになる。当面する課題、あるいは今後の研究の進め方についても各メンバーがまとめたものを引用することにするが、次年度以降は、こうしたそれぞれの課題をめぐる個別研究を進めるとともに、東南アジアの地域性に迫るために「複合性」というキーワードをとりあげて共同研究の内容を充実させる。また、関連する他の研究班、とくにA02の公募研究班や、A03、B03などの計画研究班との研究交流をさらに進め、東南アジアの地域性に迫ることにはしたい。

坪内良博： 東南アジアは、上述の小人口状況を背景に、人口移動が顕著であり、とくに開発地における移民の重複や、都市における交錯等を契機として、社会における複合が重要な特性となった。今後は、小人口状況の把握と理解をさらに深めつつ、移民が形成した社会の性格や、東南アジアの都市という空間の特質について、資料収集、整理を進め、これらの要素を考慮に入れて、東南アジア社会の形成論理を解明していきたい。

石井 溥： これまでは、ネパールおよび北インドの一部のカースト社会の比較が中心であったが、比較考察を、より広い視野をもって進めることが当面の課題である。それは、次のような3段階で行うことを予定している：(1) ネパール、ブータン、シッキムおよびその周辺の非カースト的社会との比較考察、(2) 南アジアの他のカースト社会との比較、(3) 東南アジアにおける中心と周辺のありかたとの比較検討。なお、カースト的世界は複数文化の併存と不平等性の許容がセットになった構造をもつが、そのような構造と、東南アジアを含む非カースト社会の構造との比較研究も将来の課題である。

加納啓良： 主に次の3つの課題について研究を進め、その成果のまとめを行いたい：(1) 東部ジャワ・バングル県の地稅賦課「詳細査定簿」のデータの入力作業を終え、その分析を行

うこと、(2) 上記の成果を、かつて行った東部ジャワ・マラン県（バンギル県の南隣）についての同種の作業の成果と比較し、19世紀初めにおける農業発展の先進中核地域（バンギル県）と後進周辺地域（マラン県）との対比を明らかにすること、(3) ジャワにおける地稅制度導入の歴史過程を整理し、日本、台湾などのケースと対比しながら、ジャワにおける稠密型稲作農業社会形成の比較史的意味を考察すること。

北原 淳： 「共同体文化」のもとでの人々の認識の構造的特徴を、アニミズム以外の民衆仏教、バラモン教などを含めて検討し、その消極的側面だけでなく積極的側面を明らかにする。とくに、「共同体文化」の現代社会への適応能力について検討する。また、社会史的研究として、徭役制度のもとで中央の畿内と周辺の地方とがいかなる関係にあったかを、さらに具体的に検討する。

桜井由躬雄： ゾンホーとソムは、従来、まったく紹介されなかったもので、その内容は不明なところが多い。平成7年度においては、バックコック村に第3次、第4次の調査を行い、とくにファミリーヒストリーの聞き取り調査を通じて、ゾンホーとソムの社会的機能について検証する。ゾンホーとソムは紅河デルタの地域性を代表する指標と考えられるが、そのためにも、「ゾンホーとソム圏」と呼びうるような広がりを見出す必要がある。上記の「紅河デルタ村落の研究」計画では、バックコックのほか、ハーバック、ハドンの2村にも研究拠点が置かれているので、バックコックで見出されたこの特徴が他の地域においても共通するものかを検証する。

山下晋司： 上記の成果をふまえて、来年度は、以下の4点を課題としたい。(1) 東南アジアにおける植民地主義の展開のなかでエスニシティもしくは民族文化の創出に関して具体的な事例に即した分析を行う。(2) 脱植民地化＝独立と国民国家形成過程における国民あるいは民族集団としての主体構築の仕方と文化の捉え直しや流用を検討する。(3) インドネシア調査を継続し、今日のインドネシア国家とエスニシティもしくは民族文化の相関的動態に関する調査を行う。(4) これらの研究成果を「地域性の形成論理」という研究課題に連結させる論理をさぐる。

田中耕司： 来年度も、東南アジアの「フロンティア社会」としての特徴をとらえる作業を続けることになる。東南アジア各地におけるフロンティア状況については、インドネシアの南スラウェシ州で従来から行ってきた開拓前線の調査と、最近行ったカリマンタン各州での調査を比較する作業に着手する。この作業においては、資源と人間・社会との関係、なかでも森林資源や土地資源をめぐる「フロンティア状況」の比較が中心になる。また、東南アジアの社

会・文化の文脈のなかでの東南アジア固有の「フロンティア」概念の索出も今年度に続けて行っていきたい。なお、来年度の共通テーマに関連しては、開拓前線における複合的な民族構成のなかで生起する民族間関係を取り上げる予定である。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

坪内良博

- 「19世紀中葉の東南アジアの人口 — Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia における記述をめぐって」『東南アジア研究』32(3): 255-305, 1994.
「フロンティア世界への旅」『総合的地域研究』No. 8: 38-44, 1995.

石井 溥

- 「季節・儀礼・社会 — ガンジス河流域三地域の年中行事の比較」長野泰彦・井狩弥介編『インド複合文化の構造』法蔵館, pp. 57-110, 1993.

Nepal: Development and Change in a Landlocked Himalayan Kingdom. (Monumenta Serindica)

[P.P. Karan ほかと共著], Institute for the Study of Languages and Culture of Asia and Africa (ILCAA), vii+253pp., 1994.

"Affinal Prestations in a Newar Village." *Journal of Asian and African Studies*, ILCAA, 48/49, 1995.

「周辺社会における中心指向性と柔軟性 — 南アジアの北縁から」『総合的地域研究』No. 8:19-25, 1995.

加納啓良

「近代アジアの社会変容 — ジャワ、台湾の糖業を事例として」土屋健治編『講座現代アジア1 ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会, pp. 111-146, 1994.

「農民革命の政治社会学 — 東南アジアからの試論」坂本義和編『世界政治の構造変動 3 発展』岩波書店, pp. 87-147, 1994.

「国際貿易から見た20世紀の東南アジア植民地経済 — アジア太平洋市場への包摂」『歴史評論』No. 539: 39-55, 1995.

「『フロンティア』とジャワニサシ」『総合的地域研究』No. 8: 3-9, 1995.

北原 淳

「『東アジア経済圏』の工業化と政治変動」北原淳・大野道邦編『社会学 理論・比較・文化』晃洋書房, pp. 175-197, 1994.

「東南アジアの資本主義発展に関するマードック大学グループの研究」『経済と社会』2:194-203, 1995.

『タイ:工業化と地域社会の変動』（赤木攻と共編著）法律文化社, 1995.

「タイの地方国における徭役制度」『総合的地域研究』No. 8: 26-31, 1995.

「共同体意識と村落開発: タイNGO農村開発理論の検討」『社会学雑誌』12, 1995（印刷中）.

桜井由躬雄

『世界史B』（尾形勇・後藤明・福井憲彦・山本秀行・宮崎正勝と共著）東京書籍, 1994.

「東南アジアの生態的枠組み」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社, pp. 22-47, 1994.

「辺境と集団性 — 紅河デルタ村落報告」『総合的地域研究』No. 8:10-18, 1995.

山下晋司

- 「ポストモダン・ツーリズム — パプアニューギニア・セピック川流域の観光」『創文』 No. 351: 16-19, 1994.
- 「民俗芸能を伝承する論理 — 松戸市和名ヶ谷の三匹獅子舞」『千葉県松戸市の三匹獅子舞』（松戸市立博物館調査報告1）松戸市立博物館, pp. 141-150, 1994.
- 「民族文化の語りかた」『季刊民族学』No. 68: 57, 1994.
- 「神話と歴史 — 歴史人類学の可能性」『国文学』39(6): 28-35, 1994.
- 「都市の語りとしての大衆音楽 — インドネシアにおける国家・音楽・社会」関本照夫・船曳建夫編『国民国家が生れる時』リプロポート, pp. 33-66, 1994.
- 「世界システムのなかの民族文化 — 文化人類学のフロンティア」『自動車とその世界』259: 44-47, 1994.
- 「神話と儀礼」佐々木宏幹・村武精一編『宗教人類学』新曜社, pp. 95-105, 1994.
- "Manipulating Ethnic Tradition: The Funeral Ceremony, Tourism, and Television among the Toraja of Sulawesi." *Indonesia* 58: 69-82, 1994.
- 「フロンティアの民族文化 — インドネシアの調査から」『総合的地域研究』No. 8: 32-37, 1995.

田中耕司

- 「東南スラウェシ州再訪」『東南アジア研究』31(4): 440-441, 1994.
- 『東南アジア海域世界の森と海』（重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰」公募研究班成果報告書, 田中耕司編著）, 京都大学東南アジア研究センター, 149pp., 1994.
- 「地域開発」『インドネシアの農林業 — 現状と開発の課題』国際農林業協力協会, pp. 62-66, 1994.
- "Transformation of Rice-Based Cropping Patterns in the Mekong Delta of Vietnam." In *A Study on Conventional Farming Systems and Its Development — In the Case of Southeast Asia*, ed. by K. Ohara and V. Salokhe, Mie University, pp. 119-127, 1994.
- 「森は誰のもの — 南スラウェシ州の開拓前線における森林と農地の境界」『総合的地域研究』No. 8: 45-51, 1995.